文部省道徳教育推進指導資料作成協力者会議・指導資料の作成にかかわって

―　「峠」「スダチの苗木」に込めた願い　―

私は１９９３年度、文部省道徳教育読み物資料作成協力者会議の委員の１人として文部省での会議に参加した。その会議の中で私は、部落出身である自分の生い立ちや生きざまをさらけ出し、部落問題学習の重要性を訴えていった。

そして、全国すべての中学校で部落差別解消への取り組みがなされていくことを願って、先ほど話をさせていただいた私の父親への思いを「スダチの苗木」という作品にまとめ、今なお血をふいている結婚差別の現実を「峠」という作品にまとめた。

以下二つの作品及びその指導の手引きを掲載しておきたい。

※　　※　　※

【作品】

スダチの苗木

東京オリンピック（１９６４年）の翌年、私は小学校に入学した。高度経済成長期に少年時代を過ごした。当時、毎週土曜日の夜テレビで放送されていた「巨人の星」が楽しみだった。主人公の父星一徹が工事現場で働く場面がよく出てきた。私にはその姿と汗と泥にまみれて働いている私の父の姿とが重なっていた。主人公星飛雄馬は青雲高校の入学試験の面接で、父の仕事を問われたとき、堂々と「父の仕事は日雇い人夫です」と答える。その言葉は私にとって大変な驚きであり、今も忘れることのない場面として鮮明に脳裏に焼きついている。

当時の学校では、学年当初に提出する書類の中に家庭環境調査というのがあった。その中には必ず保護者の職業欄があり、その欄に何と書こうかと、父と母が相談していたことをはっきり覚えている。ある年は「運転手」と書いてくれた。父には建設会社のマイクロバスの運転をしていたことで、会社から日給以外に手当があったからだ。また、ある年は「農業」と書いてくれた。家族が食べるだけの米を作っていたからだ。父も母もマイクロバスの運転をすることや米を作ることが、家計の足しになっているんだから、こう書くことは嘘を書いているのではないと話してくれた。

当時、親が私に気を遣ってくれていることは幼いなりに痛いほど分かった。そんな状況の中でも父は私たち兄弟に「父ちゃんはみんなが使う道路をつくっている。」と誇らしげに話してくれたが、自分は将来はっきりと人に言うことのできる職業につきたいと思うだけで、父の仕事に寄せる思いを分かろうとはしなかった。

父は私を頭に４人の子どもを育てるために休むことなく働き続けた。子育ての終わった今も、父は財布を持たない。給料はすべて母に渡し、自分が自由にお金を使うことはほとんどない。夕食の時にわずかな晩酌をすることぐらいしか楽しみを持たない父、ただひたむきに働き続ける父、今の私は心の底から感謝できるが、以前の私はそんな父の姿が無性に悲しかった。

高校時代、学校が休みの日に父は自分の運転する建設会社のマイクロバスで、工事現場に何度となくアルバイトに連れていってくれた。そのことを通して、父は私たち兄弟にも働くことの厳しさやその意味を教えたかったのだろう。私はひたむきに働く父の姿に誇らしいものを感じながらも、現場へ向かう途中に友だちと顔を合わせることをおそれていた。父には申し訳ないと思い

ながらも、友だちに気づかれまいと顔を隠そうとしていた。

高校３年になる春休み、大阪の病院で入院していたおじを父といっしょに見舞い、その日の午後京都を訪れた。父と見た春の京都はとても美しく、心を清らかにしてくれた。京都御所の小雨に濡れた砂利道。歴史の重みを感じさせる町並み。初めて経験した父と２人だけの旅であった。古都の風情に触れて父は自分の生い立ちを語り始めた。８人兄弟の３番目に生まれ、祖父の身体が弱かったために、中学を卒業してからずっと２人の兄とともに、５人の妹や弟たちの生活を支え働き続けた苦労話である。耳をおおいたくなるようなつらい話を父は自分の役割として当然のように話した。父の心のうちを聞いたのはそのときが初めてであった。

１年後、私は父の思いに初めて触れた京都を大学への進学先に選んだ。

京都での４年間、下宿先のおばさんにずいぶんお世話になった。おばさんはまるで母のように私たち下宿生の世話をしてくれた。当時の下宿としては大変珍しかったが洗濯までしてくれた。どろどろに汚れた靴下が真っ白になって返ってきた。また、田舎に帰るときは土産まで持たせてくれた。そんなおばさんの姿と重ねて、父や母を思い続けて大学生活を送った。

大学生活が終わって京都の下宿を引き払う時、父は親戚から１トントラックを借りて荷物を取りにきてくれた。父が下宿を訪れたのはこのときが初めてだった。真っ黒に日焼けした作業服姿の父を見たとき、最後の最後ぐらい背広にネクタイで来てくれたらと思った。同じ下宿にいた大学の後輩たちの両親が京都へたびたび来ていたが、その姿は私の父の姿とは全く異なっていた。

父は、ふるさとの花であるスダチの苗木をトラックの荷台に積んでいた。

「どうしてそんなものを積んできたの。」

と不機嫌になって聞いた。父は私を見つめて、

「お前がお世話になったお礼に、おばさんのお宅に植えさせてもらおうと思うて‥‥。」

初めて下宿へきた父の精一杯の感謝の気持ちであった。しかし私には、もっと気のきいた感謝の仕方があるだろうという思いがあった。

苗木を植える父の姿、身体を動かすことを通して感謝の心を表わす父の姿を見たとき、このことはだれにも言うまいと心に誓う自分があった。少年の頃から抱いてきた父の仕事へのこだわり、その意識は私自身の生きる方向を見失わせていた。

ふるさとに帰って数ヶ月が経過したある日、私はある出来事から大学時代に父が身体をこわし、何か月か入院していたことを知った。当時、正月ぐらいしかふるさとへ帰ってこなかった私には、父の入院は知らされていなかった。それは私に心配をさせまいとする父母の思いからであった。厳しい病状の中にありながら、入院した父は病室のベッドで仕事の段取りをした。母は父に代わってマイクロバスを運転し現場の切り回しをした。そこまでしなければ子ども４人を上の学校へはやれなかった父母の精一杯の生き方であった。特に私が無事大学を卒業するまではとがんばり続け、生命を削ってまで働き続けたこの事実を話してくれたのは父でも母でもなかった。このことが私の心にかつて経験したことのない重いものを残した。「子どものために」ということを決して口にせず、ひたむきに生き働き続けた父と母に私の心は激しく震えた。

私はそんな父や母のことを胸に秘めながら、今でも人生の節目節目に京都の下宿を訪れる。結婚、子どもの誕生とすでに何度か足を運んだが、そのたびにおばさんはしみじみと話してくれる。

「ご家族の皆さんはお元気ですか。お父さんの持ってきてくださったスダチの苗木は立派に育っています。花はまだ咲きませんけど、あの木を見るたびにあなた方のことを思い出すんです。」

下宿をやめられて数年が経過しもう８０歳を越えたおばさんである。

スダチの白い花が咲く頃になると、私はきまって父が植えた苗木のことを思い出す。

※　　※　　※

【指導の手引き】

スダチの苗木　　＜第２・３学年　４ー（５）＞

1　ねらい

父母への感謝と敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚を高める。

2　資料の特質

〔資料の内容〕

厳しい肉体労働に生きる父と母の姿に感謝と敬愛の心を抱きながらも、父の仕事にこだわっていた筆者が、ふるさとに帰って、病気入院中でも、母と力を合わせて働いていた父のことを知って、強い衝撃と感動に打たれる。そして、筆者は父が京都の下宿に植えていったスダチの苗木に思いを寄せ、スダチの花に自らの生き方を確かめるようになる。

〔資料の生かし方〕

「日雇い人夫」の意味を理解させ、肉体労働者への社会的な差別意識にこだわる筆者の心を理解すると共に、父を誇りに思いながらも、外見的なものや他人の眼を意識して、素直に感謝の気持ちを表わせない心の揺れを広い視野からとらえ、父母への感謝と敬愛の念を深めさせたい。

3　事前指導の工夫

生徒が家族の思いや働く姿をどれだけ知り、父母の日頃の言動にどんな思いをもっているかを生活記録などから把握しておく。

4　展開例

例１　父の働く姿に接して揺れる筆者の心の動きを通して、家族の一員としての自覚やあり方を考えさせる。

○　筆者が父の働く姿に誇りを感じながらも、なぜ友だちに気づかれまいとしたのだろうか。

○　父が下宿先へスダチの苗木を持ってきたとき、筆者はどんな気持ちだっただろうか。

◎　父が入院中も母と力を合わせて働いていたことを知った筆者の思いについて考えてみよう。

○　なぜ人生の節目節目に筆者は、京都の下宿を訪れるのだろうか。

○　自分の持っている父母への思いと重なるところがないだろうか。

例２　父母の働く姿から、父母への感謝と敬愛の心を深めさせる。

○　職業欄に「運転手」または「農業」と書いた両親はどんな気持ちだったのだろうか。

○　給料のすべてを母に渡し、子どものために働き続ける父の姿をどう思うか。

○　自らの生いたちを語った父の気持ちについて考えてみよう。

◎　「子どものために」ということを口にしなかった両親について考えてみよう。

○　筆者はスダチの苗木にどのようなことを感じているのだろうか。

5　指導上の留意点及び工夫

・自分が今あるのは、父母からかけがえのない子どもとして深い愛情を持って育てられたからであることを理解し、厳しい労働の中を精一杯に生きる父母の姿に尊敬と感謝の気持ちを深めさせ、家族の一員としての自覚をもたせる。

・ふるさとの木を下宿先へのお礼と記念に植えた父の心情を理解させる。

・父母が子どものために自分を犠牲にして働いていることを、生徒自身の家族に重ね合わせて

理解させる。

6　評価の工夫

・自分の家族がどんな思いで働いているか、また父母に対してどのような思いを持っているかを終末の発言から把握する。

7　事後指導の工夫

・生徒の発言から家族への思いを知り、個別指導をしていく。

・職業についての偏見や差別意識が残っている生徒には、改めてきめ細かい指導をしていく。

・学級通信などでこの資料や生徒の発言、感想などを知らせ、家庭で話し合わせるようにする。

8　その他

・この資料は、４ー（４）「勤労の尊さ」や４ー（３）「差別や偏見」の資料としても活用できる。

※　　※　　※

【作品】

峠

『　生きるということ
　　愛するということ
　　相手のいのちを尊ぶこと
　　私たち二人は　永遠に
　　真実を正視し
　　すべての人間を尊敬し
　　すべての人間を信頼し
　　美しさを求めて　生きていこうと誓いました
　　私たち　結婚します　』

幸司と恵子は、やっとできあがった招待状の原稿を感慨深くながめた。この招待状が生まれるまでには、２人で乗り越えなければならなかった多くの峠があったのだ。

２人が教職について３年が経過した春であった。

「恵子、もう結婚を考えていい年頃よ。だれかいい人がいるの。」

「お母さん、実は私‥‥。」

大学時代から交際を続けていた幸司のことを思い切って打ち明けた。

その翌日の夕食後、母は険しい表情で恵子に言った。

「あなたがお付き合いしている小野幸司という人、同和地区の人だということ知ってるの。」

「えっ‥‥。」

恵子の心が一瞬曇った。

「いくらあなたが結婚しようと思っていても、認めるわけにはいかないの。」

「お母さんは、他人を差別するような人ではないと信じていたのに‥‥。」

「人は遠くのことに対しては美しく生きられる。でも世間はそんなにあまくはない。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の結婚に大きな障害となってくる。見合いの話なんかは全くなくなるの。」

「それが世の中よ。みんなは自分にかかわりのないところでは、差別をなくそうということは言えても、いざ自分自身の問題になるとそうはいかないの。」
いつもは口数の少ない父も、
「恵子のつらい気持ちは分かる。でもなあ、お母さんが言うように、恵子にも、私たちにも、妹の幸せを奪う権利はない。それだけじゃない。いとこたちまで、これからの結婚で肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」
恵子は返す言葉がなかった。
恵子には大学時代に友人から聞かされた言葉がよみがえってきた。
「小野君のこと知っているの。彼って、部落（被差別部落）の人よ。」
「付き合うの、やめたほうがいいと思うよ。」
「……。」
そんな恵子の一番の支えになったのは妹の励ましであった。
「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私もがんばっていくから……。」
心から応援してくれる妹の言葉がたまらなくうれしかった。しかし、恵子にはただ一つだけ気になることがあった。

数日後、恵子は幸司に思い切って話した。
「幸司は、私を信頼していない。どうして……。」
恵子の目には涙が溢れた。
幸司にはその涙の意味がすぐに分かった。幸司の心の中には、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりがあったからだ。
婚約までしていた相手との結婚が部落差別によって破れ、自らの生命を絶った幼なじみの姿が浮かんできた。絶望の中で生きる気力を失っていった悲しみが、自分のこととしてわかるのだ。恵子のすがるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。
「部落のことだろう。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、僕にとって部落は重かった。でも今は違う。人間として、この問題と向き合って生きていきたいと願っている。人生には、乗り越えなければならない峠がいくつもある。二人で共に幸せを求めて生きていこう。」
恵子は幸司の言葉にうなずいた。
「両親は、私たちの結婚に反対しているの。でもあなたとだったら説得できると思う。」
このときから大きな峠を越える２人の歩みは始まった。

「あなたのことは娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだまだ部落差別があります。親として娘を苦労の淵に追いやることはできないんです。」
初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを押さえ、言葉をかみしめて言った。
「世間には差別があると言われますけど、その世間をつくっているのは、私たち一人一人ではな

いでしょうか。お母さんは世間という実体のないものを隠れみのにして、私たち部落の人間を差別しているんだと思いませんか。」
「どんなに言われても、親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんで惑わさないでください。」
母親は感情的になって語気を強めた。幸司は必死に耐えていた。部落に生まれたことがそんなに悪いことなのか。おれがどんな悪いことをしたというんだ。腹の底からつき上げてくる怒りを思い切りぶつけて、早々にその場を立ち去りたかった。
しかし、その後も２人は必ずわかってもらえると、両親を信じて話し合いを続けた。母がいくら感情的になっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこばまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。
幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という『かげ』におびえた自分自身を語り続けた。その思いに触れて当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。
人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしまう、そんな弱さを持って生きている。そういう生き方ではなく、人間としてその間違いを正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で二人がつかんだ思いであった。
やがて両親は幸司が帰った後も、お互いの胸のうちを恵子に話すようになってきた。
「差別される痛みがわかっているから、差別しない生き方をしようとしているんでしょうね。」
「人の痛みがわかるからこそ本当に優しくなれるし、悩みながらもがんばっているんだろうね。」
「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」
恵子には部落差別が両親を苦しめていることが手に取るように分かった。だからこそ、二人の思いを理解してもらいたかった。
やがて、両親は家族だんらんの場でそれぞれの思いを語り合うようになった。
「結婚に反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結局は私たちが差別されないかと恐れて、恵子を苦しめてきたのではないかしら。」
「そのことで私たちも苦しんでいたと思う。恵子の思いを大切にしてやることが、親として当然のことだと思うようになったよ。」
「私たちが自分の『かげ』におびえていたんだわ。」
「私たちが自分の『かげ』をなくすことが、恵子を幸せにしていくことにつながるんだね。」
恵子は信じることの喜びや幸せ、人は変われるということをしみじみと実感した。

１年が経過し桜が満開になった春の日、恵子が両親に言った。
「みんなに祝福されて結婚したい。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、心の底から喜んでもらえる結婚にしたいの。」
「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えなくてはね。幸司さんの幸せは恵子の幸せなのね。」
「人を差別することは、自分自身も苦しめていく。差別は損の分け取りなんだね。」
母親のあとに父親がつぶやくように言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。
翌日訪れた幸司に母親は語った。

「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」

父親も身をのり出しながら力を込めて語った。

「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち２人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物をかついで生きていこうと話し合ったんです。」

２人でともし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。

※　　※　　※

【指導の手引き】

峠　　＜第３学年　４－（３）＞

1　ねらい

社会連帯の精神をもって差別や偏見をなくし、よりよい社会を実現する意欲を育てる。

2　資料の特質

〔資料の内容〕

部落差別の中で、最も深刻な結婚に関わる問題に取り組んだ資料であり、差別の本質を訴えている。

被差別部落出身の幸司との結婚に反対する恵子の両親の態度に苦悩しながらも、二人は深い愛情に結ばれ、誠実に自らの思いや願いを語っていき、両親を変容させていく。

〔資料の生かし方〕

恵子が母に幸司との結婚について話した。その翌日に両親は幸司が部落出身であることを調べ、世間にこだわり娘を苦しめていく姿を通して、差別はするものもされるものも、その両方が苦しんでいくことを理解させる。

特に幸司と恵子のひたむきな生き方に共感し、差別はなくしていくことができるという信念を持たせたい。また、招待状に込められた二人の生き方が、両親を変えていったことに気づかせると共に、差別や偏見をなくし、よりよい社会を実現する意欲を育てる。

3　事前指導の工夫

政治的な制度としては、江戸幕府によってつくられた被差別部落の存在が、明治４年の解放令でに廃止されたにもかかわらず、それ以降も厳しい状況におかれ、差別が残されたことを社会科の学習などを振り返って確認しておく。

4　展開例

例１　幸司や恵子、両親の生き方を通して、社会連帯の精神をもって差別や偏見をなくしていこうとする意欲を育てる。

○　「妹の幸せを奪う権利はない」といった両親の思いは、どういうものだったのだろうか。

○　幸司や恵子の両親が語った『かげ』におびえるとはどういうことだろうか。

◎　あれだけ世間体にこだわって、結婚に反対していた両親を変えたものは何だろうか。

○　「共に荷物をかついで生きていく」とは、どのような生き方だろうか。

○　部落差別を始めとする様々な差別をなくすということは、自分にとってどんな意味があるのだろうか。

例２　幸司や恵子の苦悩に寄り添い、その立場に立って考え、積極的に差別解消に取り組む意欲

を育てる。

○　「私を信頼していない」と言い出すまでの恵子の気持ちは、どのようなものだっただろうか。

○　恵子に対して静かに語り出した幸司には、部落についてどんな思いがあったのだろうか。

◎　二人が「この問題と向き合って生きていく」とは、どのように生きていくことだろうか。

○　結婚式の招待状に記された「美しさを求めて生きる」とは、どのように生きていくことだろうか。

5　指導上の留意点及び工夫

・私たちにとって部落問題の解決は国民的課題であり、国の責務であることを理解し、様々な差別を自分自身の生き方の問題としてとらえさせる。

・両親を信頼して、二人の生き方を真剣に語り続けたことが、両親を変容させ、両親の確かな生き方につながったことを理解させる。

6　事後指導の工夫

「私と差別問題」という視点で授業後の感想をまとめ、部落差別だけでなく他の様々な差別や偏見をなくすことが、自分自身の幸せにつながることを理解させるとともに、日常生活の中でよりよい社会を実現する態度を養う。

7　その他

本資料は、現実にあった差別を乗り越えた部落出身教師の体験をもとにした資料である。部落問題は、まだまだ厳しいものとして残っている。今後いっそう差別や偏見の解消に取り組む意欲を高め態度を養いたい。

※　　※　　※

この二つの作品が、文部省「中学校道徳読み物資料とその利用」（主として集団や社会とのかかわりに関すること）に掲載されるまでの道のりは、まさしく峠を越えていく営みであったと思う。これらの作品は未だ部落問題に関わる作品を文部省が道徳教育の資料として取り上げたことがないという厳しい現実の乗り越えて、作品として日の眼を見ることができた。その営みを今一度整理しておきたいと思う。

※　　※　　※

道徳教育推進指導資料作成協力者会議の委員として、中学校における道徳教育推進指導資料（指導の手引）４「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の資料づくりに取り組むようになり、１９９３年８月３１日より文部省での会議に参加することになる。期間は本年３月までとなっており、３月末までに１２回の会議が開かれるようになった。

会議は８月（３１日）の組織づくりの会議。そして９月（１３日、２４日）に２回、１０月（４日）に１回、１１月（１３日）に１回、１２月（７日、２７日）に２回、１月（２４日）に１回、２月（２日、２１日）に２回、３月（８日、２４日）に２回と１２回実施された。

私は８月の会議で４の視点「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の中の内容項目４の（３）「正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、社会連帯の精神をもって差別や偏見のないよりよい社会の実現に尽くすように努める」と内容項目４の（５）「父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くようにする」を担当するようになった。特に内容項目４の（３）には大いなるこだわりをもっていた。

内容項目４の（３）について中学校指導書「道徳編」（平成元年）には次のような記述がある。

《中学生になると、自己中心的な考え方や行動をとりがちである。この時期に、性・年齢・身分・能力等において、だれに対しても公正・公平に接し、差別や偏見を持たないように心掛ける社会連帯の精神が何よりも大切で、そのことに生徒自らが気づくように指導する必要がある。

社会連帯の精神は、一人よがりの正義に基づくものではない。自分本位であったり、自分が所属している集団にこだわり続けるようでは、社会に生きる人間として適正さを欠くことになる。

正義を重んずるということは、観念的な道理を把握することではなく、正しいことを自ら積極的に実践に移せるようでなければならない。「見て見ぬふりをする」とか、「避けて通る」という消極的な立場ではなく、不正を憎み、不正な言動を断固として否定するほどの、たくましい人間が育ってくるように指導することが大切である。

この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力するよう、指導することを忘れてはならない。》

最後の文章「この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力する」へのこだわり、それは今まで文部省が出した道徳の指導資料、特に昭和４２年にまとめられた「中学校道徳の指導資料」（文部省刊）３集、昭和５１年から刊行されてきた「中学校道徳の指導資料とその利用」（文部省刊）６集の中にも、今回の平成３年から刊行されている「中学校読み物資料とその利用」（文部省刊）視点１～３の中にも、ただの一つも部落問題を取り上げた資料がない。

全国同和教育研究協議会結成４０年を越え、全国同和教育研究大会では、西日本を中心に２万人から３万人の参会者で開催されている。しかし、いまだに同和教育は日本全体の教育になっていない現実がある。

私は今回の「中学校読み物資料とその利用」（文部省刊）視点４の中にどんなことがあっても部落問題の資料を入れることを熱望した。それが徳島の地から文部省へ１０回余りも往復することの意味だと思った。

９月１４日の最初の原稿検討会で私は内容項目４の（３）の資料に、１９９２年度末にまとめた「よろこび」第２号の冒頭の文章である「スダチの苗木とキンカンの苗木」を作品の原案として提出した。その資料は以下のものであった。

※　　※　　※

【資料】

スダチの苗木とキンカンの苗木

私が被差別部落（以下部落）の人間であることを初めて知ったのは、中学２年の時であった。それまでは部落問題の存在は知っていたけど、まさかそれが自分のことであるとは夢にも思っていなかった。それは学習会の会場での友人との会話からである。

部落問題に積極的な考えを持っていたＹ夫が話し出す。

「これ、わしやのことでよ。わしらは部落に生まれたことになっとんでよ。」

この言葉で私は初めて自分が部落の人間であることを自覚する。同じ立場の仲間から聞かされたことによって、大きなショックはなかったが、何か心の中に重たいものがのしかかってくる感じであった。そして、そのときにＹ夫が私に対して囁いた言葉が、後の私の大きな支えとなって

残っている。
「学校の先生にならんで・・・・・」
その言葉に何か心がわくわくするような思いになっていった。私は中学時代、部落の仲間と共に励まし合いながら、将来、教職につくという憧れをもって頑張ってきた。しかし、その憧れは高校時代、段々と小さなものになっていく。
高校時代に私は丸岡忠雄さんの「ふるさと」の詩と出会う。部落問題にかかわって丸岡さんのような生き方をする人が存在することにたまらない喜びを感じながらも、私はふるさとを離れることばかり考えるようになった。それは部落問題からの逃避以外のなにものでもなかった。私の生まれた町には土方をする人がたくさんいた。それが部落差別に起因するものであることは頭ではわかっていた。しかし、私の父と母が土方仕事に従事することを表面では感謝しながらも、父の仕事に対する恥ずかしさがあった。高校時代、休日に父の運転する車で建設現場に何度となくアルバイトに行った。そんな時、友だちと擦れ違う。父には申し訳ないと思いながらも、知らず知らずのうちに気づかれまいと顔を隠そうとする。心の中は顔から火が出るほど恥ずかしい気持ちになっていた。
小学校の頃、学年の最初に提出する家庭環境調査の父の職業の欄を書く時、両親が相談していたことをはっきり覚えている。両親の心の中にも土方であることを小学校の先生に隠しておきたいという気持ちがあったのだろう。ある年は「運転手」と書いてくれた。建設会社のマイクロバスの運転をして他の人夫さんを運んでいたからだった。ある年は「農業」と書いてくれた。わずかばかり家族が食べるだけの米を作っていたからだった。どれもこれもすべて嘘であった。当時、親が私に気を使ってくれていることは小さいなりに痛いほどわかったが、子ども心に私は将来、はっきりと人に言うことのできる仕事につきたいと思うだけで、父の仕事に嫌悪感さえ持っていた。
そんな思いを引きずったままで中学時代、高校時代を過ごしていく。中学時代同じ立場の仲間がいた中では、ある程度自分に自信を持って頑張ることができていたのだが、高校時代では全く駄目であった。高校時代、何の前触れもなく、突然に部落問題についてのロングホームがあった。クラスでただ一人、部落の人間であることを隠してその話し合いに参加するのはつらいものがあった。差別的な発言をするクラスメートはいなかったが、無関心な生徒や部落の人たちを可哀相な存在としかとらえていない生徒が大半である状況に、私は苛立ちを感じながらも、ただ黙って耐えていくだけであった。そんな中で私は、県外の大学に進学することをまず第一に考えていく。私が県外で大学生活を送るということは、そんなふるさとや親から逃避することであり、それはその底にある部落問題から逃げていくことでもあった。
私は大学時代を京都で過ごした。祖父に連れられて高校３年の春に見た京都は、とても美しく心を清らかにしてくれた。祖父と共に歩いた京都御所の小雨に濡れた砂利道。そして、歴史の重みを感じさせるその町並みは、京都での大学生活への大きなあこがれとなっていった。そんな高校時代のあこがれが現実のものとなり、京都で大学時代を過ごすようになる。しかし、そんなあこがれの気持ちを打ち砕いていくかのように、私は京都の地において部落問題にかかわり、何度となく切なく苦しい思いをしていく。部落問題から逃げようとしたが京都においても、部落差別の現実を目の当りにしていく。差別はどこまでも追いかけてくるのかと思った。
京都での部落差別の現実の中で、最もショックだったのは、アルバイト先のおばさんに四本指を突きつけられた時だった。それは私に対してではなかったが、ふるさとを離れて暮らす私には、

無理をしてでも私を大学まで行かせてくれた父や母、祖父や祖母の生きてきた道のりの中にもこんな差別がいっぱいあったのかと思われ、その夜、遠くふるさとで私を支えてくれる家族のことが思われて、無性に悲しく、体の力が抜けるようになった口惜しさをかみしめていた。私はその日のことを忘れることはない。

もう一つ、母のように洗濯をしてくれ、田舎に帰るときは、必ず京都の土産を持たせてくれ、心の底からこんなすばらしい人はいないと信頼していた下宿のおばさんの言葉も、忘れられないものとなっている。下宿のある下鴨界隈をうろつく近くの部落の少年たちを指しておばさんは言われた。

「森口さん、あの子たちは、生まれがちがいますから。かかわらないで‥‥」

私はこの言葉の奥にあるものを敏感に感じた。部落差別はあらゆる人の中に偏見となって、巧妙に脈々と生き続けていることを深く認識した瞬間でもあった。

信頼する人から出る差別は本当につらいものがある。そのような状況の中で私は部落出身であることをひたすらに隠し続けた。特に心から信頼し、感謝し続けた下宿のおばさんに対して、お世話になった大学２年の４月から大学４年の３月卒業までの３年間、本当のことを隠し続けて京都を去ったことが、今も悲しい思い出となっている。

「おばさん、私はおばさんが言われる生まれがちがうという人たちと同じ立場の人間なんです。私の父親は、私の母親は、厳しい差別の中を世間から笑われながらも、ひたむきに土方をして泥にまみれて、私たち４人の兄弟を精一杯に育ててくれました。私は私の両親や、祖父や祖母を苦しめてきた部落差別をどんなことがあってもなくしていきたいと思っているんです。」

そんなことが言えたらどんなに自分は救われるだろうかと何度も思った。京都で出会った部落問題の現実、その現実にふれるたび、ふるさとへの思いは募ってくる。ふるさとへ帰ろう。このような思いを味わっていくであろう部落の後輩たちに応えていく同和教育を実践していく教師になりたいと思った。私に再び、教師になることを決断させたのは京都での大学時代、京都での暮らしであった。

京都の下宿を引き払う時に、父が荷物を運ぶために親戚から１トントラックを借りて私の下宿へきた。父が京都のこの下宿を訪れたのはこれが初めてだった。私には１人の弟と２人の妹がいたが、私を頭に４人の子どもを育てるために、休むことなく働き続けた父の姿をこの時しみじみと思った。私は父が毎日の生活の中でお金を持っているのを見たことがない。父は財布を持たない人であった。給料はすべて母に渡し、自分が自由にお金を使うことはほとんどなかった。晩御飯の時にわずかな晩酌をすることぐらいしか楽しみを持たない父の姿、ただひたむきに働き続けた父の姿、心の底から感謝できるが、当時の私にはそんな父の姿がとても憐れにも写っていた。同じ下宿にいた大学の後輩たちの両親が京都へたびたびきていたが、その姿は私の父の姿とは全く異なっていた。

私には初めて下宿を訪れた父の姿が、とてもみすぼらしく写る。最後の最後ぐらいこじゃんとした格好できてくれたらとさえ思っていた。父はスダチの苗木とキンカンの苗木をトラックの荷台につんでいた。どうしてそんな苗木を積んできたのかと聞くと父親は言う。

「お前が世話になったお礼に、おばさんのお宅に植えさせてもらおうと思うて‥‥‥。」

私はそのとき何も言葉を返さなかったが、心の中ではこの父の行為を軽蔑していた。もっと気にきいた礼の仕方があるだろうにと思った。こんな形でしか礼をすることができない父の姿を憐れにさえ思っていた。そしてこのことはだれにも言うまいと心に誓っていた。

でも私には苦労しながら、自分のあらゆるものを子育てにぶつけてくれた両親に応えたいという思いはある。その思いが教師という道を選ばせた。しかし、父へのこだわりや部落へのこだわりをもつ私に、確かな同和教育はなかなかできるものではなかった。常に思いが空回りしていく。そしてどこかで自分を押さえていく。自分が傷つくことを恐れていた。

私を部落の人間と知っている人たちとの話し合い、語らいには熱っぽくなるが、私のことを部落出身と知らない人との会話では、常に一歩引いた弱さがあった。私は部落の人間でありながら、心の奥底では、部落を恥ずかしがり部落を差別していた。

そんな私は、自分自身の教師になろうとした原点を求めて、幾度となく京都を訪れる。特に結婚した折、子どもが生まれた折、そんな人生の節目節目に必ず京都の下宿を訪れた。下宿をたずねる度におばさんが話してくれる。それは父が植えていったスダチとキンカンの苗木のことである。

「ご家族の皆さんはお元気ですか。おとうさんの持ってきてくださった苗木は立派に育っています。まだスダチの花は咲きませんけど、キンカンは立派に花を咲かせます。あの木を見る度に森口さんたちがおいでた頃を思い出すんです。」

下宿をやめられて数年が経過し、もう８０歳を越えたおばさんであるが、いつもしみじみと語られる。その度に私の父に対するこだわりが、洗われていく思いであった。私はおばさんの温かい思いや自分自身の本当の生き方をぶつけた同和教育の実践の中から、かつて恥ずかしいこととしか思わなかったことが、自分自身の生きる誇りと変わっていく。私は私のこの同和教育の実践の記録を一昨年より「よろこび」～わが人生の礎として～にまとめていく。そして昨年度まとめた「よろこび」～わが人生の礎として～（２号）の冒頭に、「スダチの苗木とキンカンの苗木」と題した私自身の変革、目覚めというべき文章と掲載した。私はその実践記録を父親に一番に読んでもらうことを願い、その冊子を父親に渡す。父は顔を真っ赤にしてその文章を読んでいく。

私は父に言った。

「父ちゃん、土方仕事をして、一生懸命に働いて、必死に４人の子を育ててきたことが誇りになる。そんな社会になっていかなあかんと思う。わしはそんなことを同和教育の取り組みの中から思うようになってきた。人間の誇りというものはどれだけひたむきに生きたかだと思う。一生懸命働きよる父ちゃんの本当の思いに気づき、父ちゃんの頑張りに誇りをもって生きていくことが、ほんまの人間の生き方やと思う。わしの中学時代と同じ思いの中で揺れている中学生にしっかりと生きることの意味を伝えていきたい。そして、人間として生きる誇りを共につかんでいきたいと思うとんや。」

父は真剣に私を見つめていた。かつて私が見たことのないような鋭い眼差しで私を見つめている。そして語ってくれた。

「お前のような先生がおったら、部落の子は、ほんまにうれしいだろうな。」

この言葉に私は胸の奥からこみあげてくる熱いものを感じていく。私はこの父たちの思いに応えていく同和教育の実践をどんなことがあって頑張り抜く。それが本当の教育だと信じているから・・・・。

（おわり）

※　　※　　※

私の思いのすべてを綴ったこの文章を読み上げたとき、委員の先生方はかなり驚かれたと思う。どうしてこんな人間がこの会議の中にいるのかというような思いになられた先生もおいでたと思

う。私はその会議でひたむきに私の思いを語っていった。その当時のことを私は次のように記している。

《８月中旬、私はそのことの重大さを感じつつ１回目の会議に参加する。自己紹介のとき、私は私なりの道徳教育に寄せる思いを語る。どうしてこの会議に参加しているのか、ここに呼ばれてきたのか、不安はいっぱいであったがやりがいを感じた会議となった。

２回目の会議、各自が担当した内容項目の作品を持ち寄る。私が担当している内容項目４の（３）に私は私のすべてをぶつけた作品「スダチの苗木とキンカンの苗木」を用意した。今までの資料の中に全くない作品であり、否定されることはわかっていたが私自身の生き方を丸ごとぶつけた作品として、その思いを他の先生方に伝えたかった。国民的課題と言われながら、全国的に考えてまだまだ同和教育がそこまで行っていない現実。運動団体の対立による困難さ、そのことによって生じるさまざまな問題、私の力など全く及ばない現実をひしひしと感じていく。会議での他の先生方の発言も消極的な発言がほとんどであった。

予想していたとおり、私の作品を受け入れようとする意見は極めて小さいものだった。同和対策審議会答申の中に記されている国民的課題ということ、その解決は国の責務であるということ。徳島でいう教師の同和教育観の確立、そんな言葉が虚しく思えてくる。差別解消の道の険しさを思う。

私には部落差別を始めとする差別の悲しみをとらえることができないで、人間としての生き方を求めていく道徳教育は、決して成立しないという思いがある。しかし、私の訴えはなかなか伝わっていかない。だからこそもっともっと力をつけなければならないと思う。私は同和教育の実践の中でつながっている仲間のことを思いながら、自分自身を励まし自分を奮い立たせていく。

その会議が終わった後、以前からつながりのある先生に私の思いをぶつけた。その先生は静かに語ってくれた。

「同和教育はまだまだタブーでしかない。でも『スダチの苗木とキンカンの苗木』という作品は、胸を打つものがあるから、是非別の視点でまとめてみたらどうだろうか。」

今自分がやろうとしていることは何であるのか。現実は厳しい。しかし、その峠が厳しければ厳しいほど頑張る力は大きくなる。今まさに自分自身の生き方が問われていると思う。

あらゆる人に同和教育の重要性と喜びを実感させていくような作品、自らの差別意識に気づき、その差別意識を洗おうとする作品、委員の先生方に「是非ともこの作品を道徳の指導資料の中に是非とも入れませんか」と言わせる作品を私は書きたいと心から思う。もっともっと力がほしい。道は険しいだからこそ全力で頑張っていこう。》

私は部落問題が取り上げられることのない現実、私はそれ以後私なりに精一杯の歩みを続けた。その一つとして「スダチの苗木とキンカンの苗木」を４の（５）の内容項目に書き換えた。このことのよってこの作品は全国すべての地域で容易に活用される作品となる。それは一歩後退のようにも思えるが、実は大きな前進であったと確信している。当時の記録に次のようなものがある。

《９月２４日、第３回目の会議、一見妥協のようにも感じられたが、自分なりに新たな一歩を進んでいくことになる。私はこの会議で大きなものをつかんでいるようにも思える。

道徳の指導資料について私の心の中にあるのは、本物をぶつけなければ、生徒の本物の声は聞こえてこないということだ。教師の本当の思いが語られ、生徒一人一人の本当の思いが重ねられていくからこそ、一つ一つの授業がすばらしいものになっていく。私が道徳の時間において最も大切にしたいことはそのことである。その意味において、私が内容項目４の（３）として提起し

た「スダチの苗木とキンカンの苗木」は真実の作品として全国の中学生に訴えたい作品である。この作品はまさしく真実である。この作品を普遍的なものとして全国の中学生の心に届けていきたい。そこから部落問題の学習につなげていければと思う。》

「スダチの苗木とキンカンの苗木」は、多くの人と議論を重ねる中で、部落問題という記述を除き、違った角度で作品としてまとめることになった。この「スダチの苗木」としてまとまった作品について、私自身のものの見方は幅広いものになったと確信する。

しかし、会議がスタートした最初の３カ月ぐらいは、本当にいらだったし焦りもした。そして、私の心の底には、いつしか部落問題そのものが資料として取り上げられることはないというあきらめと、そこからくる苦悩があった。そんな私に他の委員の先生は段々と理解を示してくれた。

大阪教育大学の藤永先生の言葉。

「道徳教育は差別という面においてとても弱い、もっとその面にせまる作品を作らなければならないと思うんです。その意味において先生の作品『スダチの苗木とキンカンの苗木』には物凄いインパクトがあった。先生の訴えは決して無駄にはなっていかないと思いますよ。私もできる限り応援しますから差別問題を取り上げた作品、頑張って書いてみてください。」

児童文学者の大野先生の言葉。

「先生の作品にはとても胸を打たれるものがあります。被差別の側からの作品は極めて少ない。先生頑張って書きませんか。先生には多くの人を感動させる熱いものが流れていますよ。」

そんな思いに支えられて私は「峠」という作品をまとめていった。しかし、その作品を提出することになっていた１２月７日の第６回目の会議を当時の私のクラス３年Ａ組が、文化祭のときに取り組んだ人権劇『水平社バンザイ』を板野町解放文化展の生徒発表として演じることになったため欠席する。限られた会議、しかも正念場となる会議を欠席すること、それはとても苦しいものがあった。しかし、生徒と共に全力で人権劇に取り組んだことで、私は自分自身をじっくりと見つめることができた。

その苦悩の中で生まれた「峠」という作品は以下の通りである。

※　　※　　※

【資料】

峠

小野幸司と阿部恵子が出会ったのは大学時代であった。二人は地方にある大学の教育学部の同じ研究室で学んでおり、互いにひかれるものがあった。

卒業を半年後に控えた秋の日、研究室でレポートをまとめていた恵子に同級生の智子が囁いた。

「恵子さん、小野君とつきあっているみたいだけど、知っているの。」

「何のこと。」

「小野君って、あっちの人よ。」

「あっちって何。」

「ほら、部落（被差別部落）の人のことよ。」

「……。」

恵子のペンの動きがピタッと止まった。

「つきあうの、やめた方がいいと思うよ。」

「そういう考え方って、おかしいと思う……。」
　恵子はやっとの思いで答えたが、智子との間に気まずい空気が流れた。恵子が部落差別を目の前にしたのは、このときが初めてだった。恵子は、小学校時代から部落問題について学んでいたし、その不合理についても認識しているつもりだった。江戸時代に幕府は、安泰を図るために士農工商という身分制度をつくって農民に重税を課し、その不満をそらすためにその枠の中にさえ入れてもらえない低い身分をおいたこと。明治になって四民平等になり解放令がでた後も、何の対策もなされなかったためにこの身分に組み込まれた人たち（同和地区の人たち）は、その劣悪な生活実態から抜けきれず、今日法律によって生活実態の改善が図られてはいるものの、なお心理的な差別が根強く残っていること。そして、それは早急に解消しなければならない重大な社会問題であることを知識としてはわかっていた。しかし、そのときの恵子にはそれ以上の言葉を返すことはできなかった。

　部落差別が恵子自身に重くのしかかってきたのは、教職について三年が経過した秋であった。両親の知人から、何度となく見合いの話が持ち込まれていたが、恵子は幸司への思いからそのすべてを断わり続けていた。しかし、恵子の心の片隅には、大学時代の秋の日の智子との会話が刻まれており、幸司が部落出身というこだわりをなかなか乗り越えることができないでいた。それゆえに恵子は、両親に幸司との交際をなかなか切り出すことができなかった。
「恵子、もう結婚を考えていい年頃よ。だれかいい人がいるの。」
「おかあさん、実は私、結婚を考えている人がいるの。」
　思い切って幸司との交際を母に打ち明けた翌日、母は深刻な表情で恵子に詰め寄ってきた。
「あなたがお付き合いしている小野幸司という人、同和地区の人だということ知っているの。」
「そんなこと関係ないと思う。私にとって小野君は尊敬できるすばらしい人なの。」
「そういうわけにはいかないの。いくらあなたがその結婚をのぞんでも、このことだけは認めるわけにはいかない。」
　恵子の父は銀行員であり、母は自治会の世話役をしていた。特に母は部落問題解決に向けての啓発活動にも積極的に参加しており、恵子は母の生き方をいつもまぶしく見つめていた。それだけに母の言葉は大きなショックであった。恵子は母に食い下がるように訴えた。
「お母さん、お母さんは自治会の活動なんかで、いつも差別問題をなくさなければと訴えてきたんじゃないの。どうして私のことは認めてくれないの。」
「人のこと、遠くのことに対しては人間は美しくいられるの。でも現実はそんなにあまくはないの。あなたの結婚を認めたら、たちまち妹の愛子の結婚に大きな障害となっていく。たぶん見合いの話なんかは全くなくなると思う。それが世の中の現実なの。みんなは自分に関わりのないところでは差別をなくそうということは言えるの。でもその中にはなかなか飛び込めないものなの」
「それはおかしいと思う。お母さんはわかってくれると、思っていたのに……。」
「まだ恵子にはわからないかもしれないけど、世の中はそんなに簡単にはいかないの。これ以上お母さんたちを苦しめないで……。」
　口数の少ない父も、このときは違っていた。
「お前のつらい気持ちはわかる。でもなあ、お母さんが言うように、お前にも、私たち両親にも、愛子の幸せを奪う権利はない。それだけではない。お前のいとこたちも、これからの結婚に関わって肩身の狭い思いをしていくんだ。それが部落差別なんだ。」

恵子は返す言葉を失い黙り込んでしまった。その場にいた祖母も何とも言えない悲しそうな表情をしていた。その夜、恵子と家族の間に大きな溝ができてしまった。恵子にとって何よりつらかったことは、祖母がショックで寝込んでしまったことだった。

恵子は苦しみ続けた。信頼できる友人に相談もしたが、家族の強い反対を押し切ることへのためらいを消し去ってしまうことはできなかった。そんな中で一番の支えになったのは、県外の大学で学んでいた妹の励ましであった。

「お姉ちゃん、絶対に負けないで。私もお姉ちゃんのように世間に惑わされない生き方をしたいと思っている。お姉ちゃんが本当の幸せをつかもうとしているように、私も頑張っていくから・・・・・。」

真実をしっかり見つめながら、力いっぱい応援しくれる妹の言葉が、たまらなくうれしかった。また、同じ職場の先輩の励ましもあった。

「両親にわかってもらえるまで話し合いを続けることよ。あなたの両親だもの必ずわかってくれる。それと、小野君としっかり語り合っていくことが大切よ。」

恵子の重苦しい気持ちは少しずつ楽になっていった。もう一つ気になることは、それまで幸司と何度か部落問題について語り合ったことがあるのに、幸司自身から部落出身であるということを聞かされていなかったことだった。恵子は幸司との絆を確かめるためにも、幸司自身の口から部落出身であることを聞きたかった。

数日後、恵子は幸司に対して恵子自身の苦しみを初めて語ろうとした。しかし、恵子の心の中ではいろんな思いが交錯して適当な言葉がでてこない。恵子は思い切って幸司に言った。

「小野君は、私を信頼していない。どうして・・・・・・。」

「どうした、恵子。」

「小野君はどうして本当の気持ちを言ってくれないの・・・・・・。」

恵子の精一杯の言葉だった。恵子の目には涙が溢れた。かつて見せたことのない苦しそうな表情に幸司は困惑した。しかし、その涙の意味がはっきりとわかるのに時間はかからなかった。

幸司の中には怖れとこだわりがあった。それは部落というものがこんなに重いものかという怖れと、どうして自分から部落出身であることを語らなければならないのかというこだわりであった。恵子のすがるようなまなざしが幸司にはつらかった。しばらく沈黙が続いた後、幸司は静かに語り出した。

「恵子、部落のことだろう・・・・・・。高校の頃、ふるさとを離れることばかり考えたこともあった。その頃は、僕にとって部落は重かった。でも今は違う。教師として、この問題と向き合って生きていきたいと思っている。今はその思いでいっぱいだ。」

恵子は幸司の言葉にうなずいた。

幸司は大切にしている一冊の手帳を差し出し、その最後のページを見せた。そこには「よろこび」という詩が書かれている。

《部落で生まれ、部落で育ち、部落でくらし、運動と教育にいのちをかけて六十年。
或るときは、烈火の叫びとなり、或るときは、草にすだく虫の声となり、
或るときは、鋭く差別の事実に迫り、或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。
このみちは、きびしい荊の道なれど、この道はわが生涯のつとめなり。
ゆくさきは、幾多迫害ありとても、この営みは、わが終生の、運命なり。

しかして、この営みは、わが生命の生きがいにして、わが生命のよろこびなり。》
「おれの宝物だ、わかるか。おれはこのために教師をしていく。」
恵子は食い入るように詩を読み、幸司の言葉にうなずいた。
「私の両親は、私たちの結婚に反対しているの。でも幸司とだったら説得できると思う。」
幸司は言った。
「乗り越えなければいけない峠がいっぱいあって、本当に苦しい思いをさせるかもしれないけど、一緒に歩いてほしい。」
恵子の心の霧は晴れていき、二人の絆はより固いものとなっていった。この日から結婚差別という大きな峠を越える二人の闘いは本格的に始まった。

「あなたのことは娘から聞いています。あなたはきっといい人でしょう。でも、世間にはまだ部落差別があります。差別がある以上は娘の結婚を認めるわけにはいかないんです。」
初めて幸司が恵子の家にあいさつに行ったとき、母親から返ってきた言葉である。父親も言った。
「あなたがいい人だということはわかっています。しかし世間に差別がある以上、あなたと結婚したら必ず娘は苦労します。親として娘を苦労の淵に落とし込むことはできないんです。」
また母親はこうも言った。
「こんな反対がある中で結婚しても、幸せになれるはずがありません。結婚は二人だけの問題ではないんです。お互いが苦労していくようになるんです。」
幸司はこみ上げてくる怒りや悲しみを必死に押さえていたが、やがて静かに語り出した。
「お母さんは世間には差別があると言われましたけど、世間という一つの生き物がいて私たち部落の人間を差別しているのでしょうか。世間というのは私たち一人一人だと思うんです。お母さんは世間という実体のないものを隠れ蓑にして、私たち部落の人間を差別しているんだと思います。私の父も母も、そして祖父も祖母も、厳しい部落差別の中を生き抜き私を育ててくれました。私はそんな親や、私を支え励ましてくれた人たちの思いに応える生き方がしたいと思っています。同じ道を歩む仲間として、私は私のこれからの人生、恵子さんと共にすべての子どもたちの幸せのために、また部落差別を始めとする一切の差別をなくしていくために歩んでいきたいと思っています。」
幸司の精一杯の言葉であった。母親は口調を強めた。
「あなたがいくら頑張っても、この差別は簡単になくなるものではないんですよ。どう言われても親として不幸の中に飛び込んでいく娘を放っておくことはできません。これ以上娘をあなたの思いに引っ張りこんでまどわさないでください。お願いします。」
幸司は必死に耐えていた。しかし、どうしても耐えがたいものがあった。それは幸司の父の職業について聞かれたときであった。幸司には父の職業を否定するような問いかけに聞こえ、押さえていたものが切れていきそうになる。
「あなたのような人を育てたご両親は立派な方でしょう。お父さんはどんな仕事をされていますか。」
幸司は必死に平静を装いながら語っていく。
「私の父は安定した職業にはつけていません。それは部落差別があったからだと思っています。でも父はひたむきに働き私を育ててくれました。その父を私は誇りに思っています。私は私のこ

とをとやかく言われるのはいくらでも辛抱します。でも、私の父や母のことをとやかく言うことはどんなことがあっても許すことはできません。……。」

幸司は涙を必死にこらえた。この人たちはどう話してもわかってくれないのかと思った。怒りを思い切りぶつけて、早々にこの場を立ち去りたい思いだった。幸司は恵子を見た。恵子は激しい表情で幸司を見つめていた。恵子の思いに応えるために今頑張らなければと思うが、もうその力はなかった。

真冬の凍りつくような夜、家までの道をどう帰ったのか幸司は、はっきりとは覚えていない。涙に曇ってぼやけた道を「オーオー」と叫び声を上げながら、車を走らせたことだけが記憶にある。

それでも二人は両親を信じて話し合いを続けた。そんなある一日、玄関先で見送ってくれたおばあちゃんが優しく語りかけてくれた。

「小野さん、市の広報の記事を読んで勉強しています。頑張ってくださいよ。」

幸司は、市の広報の記事ということが、同和啓発のページであることを直感した。うれしかった。帰り道、涙がこみあげてくる。救われる思いであった。

母がいくら感情的になっても恵子は冷静であった。幸司も両親から訪問をこばまれるときもあったが、恵子との愛を貫くために、繰り返し恵子の家に足を運んだ。幸司は人間の生命まで奪ってしまう部落差別への怒りを込めて、かつて、部落という“かげ”におびえた自分自身を語り続けた。そんな中で幸司は、恵子と共に確かな生き方をつかんでいった。当初かたくなであった両親も、段々とその本心を語ってくれるようになった。両親の悩みや苦しみは幸司たちにも理解できた。

人間は世間体というものにこだわり、知らず知らずのうちにお互いを傷つけてしまう、そんな弱さを持って生きている。そういう世間に流される生き方ではなく、その間違いをしっかりと正していく生き方がしたい。両親との話し合いの中で二人がつかんだ思いであった。

「あれほど熱心にやってくるあのエネルギーって何でしょうね。」

「あの青年は恵子と共に自分自身を語ることで、人間として確かな生き方を求めているように思う。」

「人間、あんな生き方ができたら本当に幸せでしょうね。」

幸司が帰った後で語られた両親の会話であった。

月日の流れの中で次のような会話も交わされるようになった。

「結婚に反対することを恵子の幸せのためと言ってきたけど、結局は私たちの世間体しか考えていなかったことに気づいたの。お父さんはどう思う。」

「私も最近、自分のことばかり考えて、恵子の人格を認めていなかったと思うようになった。」

「この頃やっと、恵子たちが言い続けている世間の意味がわかってきたように思うの。それと、恵子が成長していく姿が、とても頼もしく見えるわ。」

「自分が世間体を乗り越えていくことが、恵子を幸せにしていくことにつながると思う。」

時間はかかりはしたが、両親の意識は確実に変わっていった。

季節が夏から秋に移る頃、恵子が両親に言った。

「結婚は、みんなに祝福されてしたい……。お父さんやお母さんにも、幸司さんのご両親にも、

心の底から喜んでもらえる結婚にしたいの。」
「そうね。自分の子どもの幸せを考えるなら、他人の子どもの幸せを考えるのが、人としての務めだと思うようになったわ。」
「人を差別することは、自分の心を縛っていく。差別は損の分け取りだね。」
両親が続けて言った。恵子はたまらなくうれしかった。大きな峠を越えたと思った。
「部落の人たちはかわいそうな人たちだと思っていました。でもあなたは人間としての誇りを持って生きています。そんなあなたを娘も尊敬しています。」
翌日訪れた幸司に母親は語った。続いて父親も膝を一歩つめて力を込めて語った。
「私も、部落の人たちは、重い荷物を背負っているかわいそうな人たちだと思っていました。しかし、その荷物の中に私たちが入っていたことにやっと気づきました。君たち二人の本当に愛し合う姿を見て、私たちも共にその荷物をかついで生きていこうと話し合ったんです。」
二人で燃やし続けてきた小さな灯が大きな炎となって燃え広がっていく。
二人は結婚式の招待状に次の言葉を記した。

『　生きるということ
愛するということ
相手のいのちを尊ぶこと
私たち二人は　現在も　そして永遠に
すべての人間を尊敬し　すべての人間を信頼し
真実を正視し　美を求めて　生きていこうと誓いました
私たち　結婚します　』

（おわり）

※　※　※

この作品は協力者会議で検討されることなく、１２月２７日の第７回目の会議の資料絞り込みの投票にかけられるようになる。私は私自身のこの資料にかける思いを添えて、すべての委員の先生方にこの作品を郵送する。そのときに添えた手紙は次のようなものであった。
《寒冷の候、先生には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。
１２月７日の会議に持っていく予定をしておりました。資料「峠」を送らせていただきます。
４の（３）の資料として、どうしてもこだわりたいものがあり、昨年の３月に結婚差別を乗り越え結婚した教え子からの結婚披露宴への招待状をベースに資料としてまとめてみました。
部落問題は国民的課題であり、その解決は国の責務であると、同和対策審議会答申に刻まれていますが、対象地区が西日本に集中しているために、同和教育の取り組みには全国的に格差があります。しかし、現実問題として、東北地方出身の人が、転勤してきた徳島の地、徳島の職場で部落差別に出会い悩み、徳島県同和教育協議会のドアをノックするという現実（部落差別を許している職場には、東北地方の人を始めとする他の地方からの少数者をよそ者として排除していく現実）があります。
また、部落差別の存在を全く知らなかった関東地方出身の女性が、その苗字から部落出身でないかと疑われ、本人の知らないところで興信所による調査を受けるという現実（部落差別があることによって、結婚した同和地区ではない男女の中に、お互いへの信頼関係をなくさせ、結婚後の生活に大きなしこりを残している現実）があります。
この二例とも、つい最近私の身近にあった出来事です。そんな差別の現実をふまえ、しっかり

とした人権意識や人権感覚を持った生徒を育成する取り組みは、道徳の時間において絶対に必要なものだと考えます。

私は人間関係の中で最も必要なことが「差別や偏見をなくし、互いの存在を尊敬し合っていくことだ」と考えます。そのことは私の学級づくりの根本になっています。そして、その営みは、部落差別を始めとする一切の差別をなくす取り組みとなっていきます。

私は本資料の主人公・小野幸司（仮名）や阿部恵子（仮名）の生き方、生きざまに生徒一人一人の生き方を重ねさせ、将来、差別解消の担い手となる生き方を生徒一人一人につかませたいと思っています。このような営みはすべての都道府県で、すべての中学校で実践されるべきだと考えます。

結婚差別の問題は部落差別だけではありません。さまざまな差別において結婚の問題は厳しい現実があります。生徒一人一人の差別意識を洗い、一切の差別を許さない生き方と人間として生きる誇りを持って、心豊かにたくましく生きる生徒を育てていくためにも、差別問題を自分の生活、自分の生き方に引き寄せて考えていくことは必要です。特に私は、さまざまな重荷を背負いながらも、ひたむきに生きる中学生にエールを送り続けたいと思っています。

中学生は、言い聞かせやお説教では絶対に変容しないということを日々の教育実践の中で実感します。生徒一人一人は、教師の誠実な生きざま、ひたむきな働きかけによって、本当の自分というものに目覚めていきます。このことは、本当の思いを語り合う仲間づくり、学級集団づくりを基盤に据えた道徳の授業実践の中から、私自身が実感し続けていることです。

「峠」と題した本資料、これは私の生き方そのものを象徴するような資料です。先生方のご意見をいただきながら、私なりに納得のいくものにしていきたいと思っています。

ご指導の程よろしくお願いいたします。》

この手紙と資料に寄せて放送作家の大野先生から手紙をいただく。

《師走も半ばになりました。ご多忙の毎日と思います。今日「峠」の原稿とお手紙を拝読致しました。読み終わってしばらく強烈な訴えかけに圧倒される思いでした。委員会の資料ということですので、批評がましいことは避けたいと思います。読み物資料は一つのプロジェクトとして公開の討議の形をとっているからです。

これまで先生方の作品には、表面をなでるだけで、子どもたちに何を訴えたいか、血を流して書いているのか、ちょっと絶望的な感じであったので、貴兄の作品には心を打たれました。私は教壇に立って子どもたちに話しかける機会はないので、なおさらに実践を通して子どもたちに訴え続けておられる努力に頭が下がります。

委員会の席で、構成や文章表現について意見を述べたり致しますが、実はそうした技巧は二の次で何より大切なのは、子どもたちに訴えたいメッセージが込められているかということなのです。資料としてではなく、作品としてまとめられるのを期待致しております。次に会う機会を楽しみにしております。》

また、横山調査官からも葉書がくる。

《前略、力作「峠」を拝読しました。かなりよく書けていると思います。身の引き締まる思いで、真剣に検討してみました。私の意見を述べておきたいと思います。

道徳の資料として見た場合に、登場人物のすべてについて内面の苦悩が描けていないと思います。（例・恵子、恵子の両親など）「ことば」として表に出た部分は書けていますが……。

もう１点、部落差別について全く知らない中学生が、この資料を読んだときにも、本質的なこ

とがわかるようにする工夫が必要です。

この２点で今一度練り直す必要があると考えます。「人間として」差別を許さないという根本の人権感覚、人間愛、人間としての誇りに根ざした資料とするために特に第１点からの見直しをして、金字塔を建ててください。》

私はこの調査官からの葉書を受け取ったとき、調査官は真剣に部落差別に関わる「峠」と題した資料を採用しようとしていると思った。本当に頑張ろうと思った。１２月２７日までのすべての時間、いつも頭の中には「峠」の作品の一つ一つが渦巻いていた。多くの先生方の支えがあった。多くの人の支えや励ましの中で生かされている自分を実感する。

１２月２７日の第７回目の会議には格別の思いで参加した。横山調査官の配慮によって、わずかな時間であったが、「峠」についての検討の時間をとっていただいた。いろんな意見が出された。私の生き方そのものに対する熱烈な励ましの言葉があった。今一度資料の中身をしっかりと点検することになったが、それは私自身のこれからの生き方に対する励ましとなって響いていく。

また、部落問題の資料を扱うのは本当に難しい。読み物資料の中に入れることは無理ではないかという意見もあった。私は静かに語った。

「道徳の指導書の内容項目４の（３）に記されている一節。『この世の中から、身分的な差別や社会的な偏見をなくすように努力し、望ましい社会の理想を掲げ、そのような社会の実現に積極的に尽くすように努力する』はまさしく部落差別の解消を訴えていると考えます。すべての教師が自らの問題としてこの学習に取り組まなければ、この学習は本物にはなっていかないのも事実です。また大半の教師がこの問題を自分自身の問題としてとらえきれていないということも事実です。だからこそ、このような資料を文部省が取り上げていく。全国すべての中学校ですべての中学教師が、自らの生き方にこの問題を重ねて学習していくスタートにしていきたいと思います。私は部落差別をなくすということは、他のさまざまな差別をなくしていくことにつながっていくと考えます。部落差別をなくすということは、障害者差別や民族差別、男女差別、さまざまな地域での差別などをなくしていくテコになっていくと考えます。どうかまだまだ差別が残されている現実を見据えてほしいと思います。」

感情的にならずに言葉が出てくる自分。９月の頃とは違う会議の雰囲気を実感する。

会議の後半に一つ一つの作品についての評価が、資料の執筆に直接かかわった１３人の委員の先生方による投票で行われた。委員の先生方の判定はとてもシビアであった。

その中で内容項目４の（３）の「峠」も、内容項目４の（５）の「スダチの苗木」も、私の予想を越える評価をいただいた。しかし、「峠」の資料について言えば、それからが正念場であったと言える。

１２月２７日の会議が終わったと、放送作家の大野先生からいろんな話をしていただく。先生の話の一つ一つが新鮮であり、大きな励ましとなって響いていく。

『かつてプロレタリア文学が、衰退していった過ちを繰り返してはいけないと思うんです。プロレタリア文学は、関心のある人には強い感動を与えていきました。しかし、関心のない人には、そんなことがあるのかという程度でその心を揺さぶってはいかなかった。

作品として部落問題を取り上げる場合の一番の課題は、関心のない人にどのような感動を与え、自分自身の生き方と重ねて考えようとする問題意識を育てていくことだと思うんです。

先生の描かれた「峠」という作品の中にも、「スダチの苗木」にも、私は強烈な感動を受けてきました。それは先生の内なる叫びに触れた感動であったし、先生の生き方と巡り合えた感動だ

ったと思うんです。森口健司という人間を知ったからこそ、その感動はより大きなものになっていったと思います。

先生はすばらしいものを持っているのだから、関心のない人の心を揺さぶっていくためにも、主義主張を表に出さず、登場人物の深い内面、その心の揺れを描いていくことが大切です。主義主張が多くなると、関心のない人はああそうかで終わってしまう。

もっともっと内面を描くことを通して読み手の心を揺さぶっていくことを考えてみませんか。そして、部落問題に無関心であった人に、これは私のことだ。私自身の問題なんだと気づかせていく。そんな作品に仕上げていきませんか。私は「峠」という作品に期待しています。』

文部省での１回１回の会議、その中で学んだことはとてつもなく大きい。特に３学期に実施された会議は、進路の仕事と重なり多忙な中での会議出席となった。帰りの飛行機の中で、そのときそのときの思いを記し続けたことが、私自身に生きる指針と大きな喜びを与えてくれた。会議で多くの先生方からいただく言葉は常に新鮮であった。その思いを飛行機の中でかみしめる場面の連続であった。２月２日の会議の帰り、つぎのような記録が手帳の中に記されている。

《ひたむきな頑張りが問われ続けている。多くの人の意見に素直に耳を傾け、その考えを自らのものにしていく姿勢。人間には誠実さがいる。そして、多くの人の思いに応えようとするひたむきさが常に必要とされる。共に苦しんでくれる人がいる。共に頑張ろうとしてくれる人がいる。自分に何ができるかを問いながら、全力で一日一日を生きていこう。多くの人の願い、多くの人の魂がこもった作品にしていこう。大半の先生方にとって同和教育は極めて遠いところにある。その現実を踏まえて、精一杯の思いを返してくれる先生方の存在がありがたい。先生方の真摯な意見に応えるためにも、もっともっと頑張らなければ……。感謝の心を生きる支えとして頑張っていこう。さまざまな工夫をこらして、よりよい生き方を求めて……。》

それ以後の会議で繰り返し、「峠」についての検討がなされていく。本当にこの作品が取り上げられることがあるのだろうかという不安を抱えつつも、心の中にはすっきりとしたものがあった。多くの先生方の支えが本当にありがたかった。特に大野先生からいただいた手紙は、私に生きる指針を示してくれた手紙として今も心の中に響き続けている。それは「峠」について綴られた手紙であった。

《今夜あなたがやりきれない憤りを抑えて、雨の中を帰っていかれる姿をずっと考え続けておりました。実は私自身への苛立ちとも重ね合わせて考えていたのです。マスコミの仕事に関わりを持っていると、否定することなく社会的な不公平と顔をつきあわさなくてはならない事があります。行政に問題を持ち込んでいくと大抵は前向きに考えてみましょうと一応は好意的なお答えが返ってくるだけで、結局はうやむやに葬りさられてしまいます。それならまだましな方で、冷淡に門前払いをくわされることの方が多いのです。新聞記者の頃、友達だった何人かは、組織に問題を持ち込むことで間接的に目的を達しようとしました。徒党を組めば問題の解決へ一歩前進したのような錯覚に捉われるものです。

森口さんが、これから対生徒や学校の世界から一歩外へ踏み出した時に立ちはだかってくる壁は、私が想像するよりも遙かに巨大なものになってくると思います。自分の力だけで、生徒や周囲の励ましだけでそれを乗り越えていけるかどうか、あなた自身の選択を迫られる時があると思います。私の友人達の取ったような道を選ぶのか、それはあなた自身がお決めになる問題であり、私自身の口出しすべき事ではありませんが、あなたがあまりにも純粋なだけに、その挫折を怖れるのです。

どうか勇気を持って立ち向かっていって下さい。祈ります。あなた自身の信念を貫いていかれることを望みます。

「峠」文集に掲載されることをどれだけ願っているか分かりません。ただ横山先生の立場も微妙で、彼にとっても難しい選択を迫られる問題だと思っています。周りへの思惑やお役所流の自己規制で、せっかくの作品が日の目を見ないことのないように願って止みません。反面、すべての人に文句なしの感動を与えるような作品を創作していくことは、今度は森口さんに課せられた使命です。「峠」が上の人達の意に沿わないのなら、それを越える作品を書けばいいのです。創造することに限度はなくその能力をあなたは与えられているのです。

今夜、家に帰って考えをまとめることもなくこの手紙を書きました。あなたが今もし、「峠」のことで苦しんでおられるのなら激励したかった。それだけの思いで書きました。便箋が途中で切れてしまいました。書き直していると別の文面になってしまいそうなので、このまま投函します。

追伸

「よろこび」本当に感動して読みました。生徒の反応がどれも生き生きとしていて、こんな手応えの得られる教師であることのすばらしさを羨ましく思えるほどです。》

※　　※　　※

峠は本当にたくさんの人たちの支えられて日の眼を見た。この結婚差別の現実をあらわした「峠」という作品は、同和教育を通してつながったかけがえのない仲間の叫びを結集させたものであり、場面の１つ１つが紛れもない事実である。

この作品の冒頭に記した結婚式の招待状。

『　生きるということ　愛するということ　相手のいのちを尊ぶこと
　　私たち二人は　永遠に　真実を正視し
　　すべての人間を尊敬し　すべての人間を信頼し
　美しさを求めて　生きていこうと誓いました
　私たち　結婚します　』

この招待状は、私が教職についた１年目に出会った、部落出身の女子生徒から贈られたものを引用した。彼女は小学校の教師となり、結婚の約束をしていた同じ職場の教師と、私のクラス３年Ｂ組（１９９１年度卒業生）の公開授業を６月（板野郡同和教育研究大会公開授業）１０月（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）１１月（徳島県中学校同和教育研究大会公開授業）と参観にきた。そしてその生徒たちが卒業していった３月に２人は結婚した。

結婚までの道のり、彼女は部落差別の厳しさを痛切に感じ、その中で投げやりになりそうな自分、負けそうな自分を相手の青年と共に励まし支え合いながら頑張り続けてきた。この２人の姿は３年Ｂ組の生徒たちに、部落解放への主体的な生き方を示していった。

猛烈に反対する母親を必死に説く青年の頑張り。その中で一番最初にこの結婚を認めてくれたのは、青年のおばあちゃんだった。一番わからないと思っていたおばあちゃんが、差別することは自分自身を苦しめ、自分の大切な孫を不幸にしていくことに気づき、一番に心を許して、

「いつまでも世間にこだわってどうする。息子のほんまの幸せを考えてやれ。」

と父親や母親を説いていった。差別という檻から解放されたとき、人間は本当に幸せになれるんだと思う。２人はまわりの人たちを部落差別から解放し、堂々と結婚していく。その２人がつくった結婚式の招待状、それは２人が中学時代にそれぞれの中学校で学習した「水平社宣言」が土

台となっている。

この招待状は私にとっても３年Ｂ組の生徒たちにとっても大切な宝物である。しかし、この２人のように厳しく険しい峠を越え、本当の幸福をつかんでいる仲間はまだまだわずかである。厳しい部落差別に喘ぎ苦しんでいる仲間の叫び声が、今もはっきりと聞こえてくる。私は１９９３年度の卒業生との最後の部落問題学習の資料にこの作品「峠」を選んだ。その授業記録は、いつまでも私と授業に取り組んだ生徒たちを励まし続ける。

この授業で、ある生徒は、自分自身が世間体の中で苦しみ差別している現実を語られた言葉や、綴られた思いを紹介する。

《差別意識の蔓延している世間におびえて、世間を気にして生きていくということは、本当にしんどいものだと思います。私は高校を選ぶ時も世間体を気にしました。私にしても私の両親にしても、世間体を気にしていく底には差別があると思います。

差別がなくなるということは、私たちが自由に安心して生きられる社会にしていくことにつながると思います。私は私を世間にこだわって縛っていくことがないように差別をなくしていきたいと思います。》

《「峠」という資料を読んで、私は本当にこんなことがあるんだなあと思った。今までは、そんなことって絶対ないと思っていた。でも、私のおばあちゃんとかも、近所の人の仲人をしているときに、「家はどのくらいの大きさ。お父さんとお母さんはどこにお勤め。お母さんのお里はどちら。……」といろいろ電話で問い合わせをしています。私はどうしてだろうと思っていたけど、家柄の同じような人となら苦労せずにすむとずっと思っていました。でも、それは本当に間違っていると思うようになりました。家がお金持ちだからとか。お父さんが○○会社に働きに行っているからとか、そんなの本人には関係ないと思います。でも関係はないけど、やっぱり世間がと思ってしまいます。世間というのは人じゃない、自分だとわかっていても、近所の人にどう思われるかがすごく気になってしまいます。

話は変わって、高校のことだけど、私は小さいときから、「Ａさんの男の子、○○高校いったんやって……。」とか、「Ｂさんは、○○高校やって。頭わるいんやな。○○や、最低や」って、周りの人が言うのを聞いていました。「Ｃさん、○○高校いったんよ。いい子やなあ。人間ができとる。」とか。そんなことを言っているのを聞いて、私は絶対いい高校に行って周りの人にいいように思われたいと思っていました。本当に本当にすごく嫌なことなんだけど、前に友達とかが、「○○先輩って、全体学習の時とか、すごいいいこと言よったのに、○○高校や行っとる。何かがっかりって思わん。」って言ったので、「うん、私もそう思う。」と答えてしまいました。それで冗談みたいに「全体学習にあんまり必死に取り組みすぎて、勉強する暇なかったんちがう。」とか話しました。やっぱり肩書きによって、その人はいい人にもなるしつまらない人にもなると思う。

そんなの絶対おかしいけど、やっぱり世間がこわいという気持ちが大きい。高校も結婚も世間ということを気にしてしまうことは似ていると思う。私は自分で決めたい。私の両親はきっとわかってくれると思う。人間の本当の誇りとは何だろうか。自分に誇りをもって堂々と生きられる人間でありたい。》

またある生徒は、１学期の授業で涙を流した自分を見つめ直し、自らの差別意識を語っていく。

《私は１学期の部落問題学習の時間、識字のことを話し合ったとき、私は私のおばあちゃんが字を書けないことから、おばあちゃんが部落の人だと思い込んで泣いてしまいました。みんなの前

であれだけ泣いてしまったのは、私の中に部落の人を差別する意識があったからでした。私の中にある差別意識が私を苦しめていました。

部落問題は部落の人だけでなく、多くの人を苦しめている現実がいっぱいあると思います。私は私の差別意識をなくしていって、あんな情けない涙を流さなくても生きていける人間になっていきたいと思います。この学習は、本当の人間になっていく学習だと思います。》

そして何より、作品「峠」の最後に記されている父親の「部落の人たちは、重い荷物を背負っている人たちだと思っていた。しかし、その荷物の中に私が入っていたことにやっと気づいた。私も共にその荷物をかついで生きていく」という言葉は、多くの生徒たちに解放の主体者として生きていく生き方を明確に示していった。

自分自身の差別意識が部落の仲間を苦しめている現実に目覚めたとき、私たちの身体には大きな衝撃が走る。

私たちは自らの差別意識が被差別の人たちの荷物の中身になっていることを自覚し、その荷物の中から抜け出してその荷物を担いでいく生き方を貫きたいと思う。それが私たちが人間として生きることの意味であり、本当の喜びをつかんでいくことになると思う。

この「峠」や「スダチの苗木」の掲載されたこの読み物資料は、すでに全国の中学校に文部省より配布されている。この資料に寄せて思わぬ人から手紙や電話をいただいた。その中には大学の先輩や友人からの手紙があった。ちょうど1年前、社会科の教員の研修会で一緒になった京都で中学校の教員をしている大学の先輩からの手紙は、本当にうれしいものだった。

※　　※　　※

拝啓　師走も半ばを過ぎようやく真冬の寒冷が身にしみると共に、学期末も迎えて大変慌ただしい季節となってまいりました今日この頃、先生にはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今日は居ても立ってもいられない気持ちでお便りをさしあげた次第です。

今日、朝から回覧文書の閲覧中、文部省発行の道徳教育推進指導資料（指導の手引き4）を手にとって何気なく開けたページから目に飛び込んだのは「スダチ」のイラストと「森口健司」という先生のお名前でした。夢中になって読んだ先生の「スダチの苗木」の文章は、まさしく昨年の夏、低気圧の接近で苦心惨憺して到着した社会科教員の研修会（北方領土教育指導者研修会）の会場である根室グランドホテルでお会いし、その際の懇親会場で先生から真摯に語っていただいた先生の生い立ちや同和教育にかける熱意そのものであり、何という因縁かと感激した次第であります。

今日、先生の一文を読ませていただき、昨年の夏の鮮烈な記憶を呼び覚ましながらお便りをさせていただきました。先生の言葉に教えられつつ、人間としての正しい生き方を今後とも模索し、同志社の良心の碑である『良心之全身ニ充満シタル丈夫ノ起リ来タラン事ヲ』念じつつ日々の仕事や生活に精進していきたいと存じます。

先生も同志社大学の柔道部で鍛えられた頑健な身体と真心でますますご活躍のことと存じますが、ご家族共々御自愛され御精進されますよう御祈念申し上げます。

※　　※　　※

人と人とにつながり、本当にありがたいものである。多くの人の生命に生かされていることを実感する。この「峠」や「スダチの苗木」の学習が、さまざまな地域で確かな方向性を持ってなされていくためにも、いっそうの実践を積み上げていきたい。